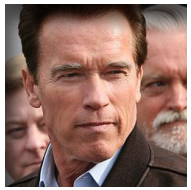
2014 April edition

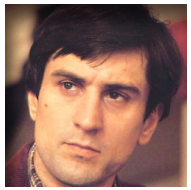
hu.cinema

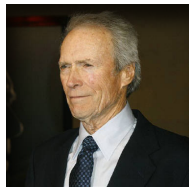


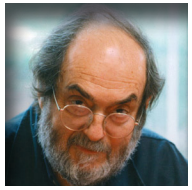
映画の話。

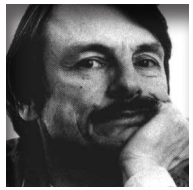
北大映研の話。

hu.cinema magazine









contents

004 北大映研の基礎知識

006 年間スケジュール

008 映研 2013BEST10

010 酒と映画と映研

016 映研部員推薦映画

018 映画はこうやって作る

北大映画研究会は映画製作を活動の中心とした北大公認サークルです。映画撮影や上映会、鑑賞会、部誌作り等の活動を通して映画との様々な関わりを目指しています。映画に少しでも興味がある人すべてに開かれたサークルです。

映画は身近でありながら人を狂わせる魅力があります。映研は映画を語れる貴重な場所であり毎週多くの映画作品を知ることができます。大学生活に少し変わった色を添えたいと考えている人は是非、活動に参加してみてください。たくさんの人とのふれあいを期待しています。

北大映画研究会　西浦直人

北大映研の基礎知識

映画との関わり方は決して一様ではない。
北大映研がどのような活動を主にしているのか、
その基礎知識を紹介。

例会

毎週金曜日の18時半から大学の教室を借りて例会を行います。例会では会議をしたり、撮影の打ち合わせをしたりなど週ごとに様々な活動を行います。

映画制作

映画制作は北大映研にとって最も重要な活動の一つです。年間約10本前後の映画・PVなどを制作しています。映画制作に興味ないと思っている人も、やってみるとハマってしまうかもしれません。

鑑賞会

北大映研にはもちろん映画鑑賞が好きな部員が大勢在籍しています。定期的に例会、部室、部員宅などで部員達で鑑賞会を開きます。また毎月1日には、部員みんなで映画館に映画を観に行きます。

上映会

映研が制作した映画を内外に向けて上映する上映会を開きます。やはり作品は他人に観てもらい評価してもらうのが一番です。新歓、北大祭など様々な機会に作品を上映します。

撮影技術研究会

毎週水曜日に部室にて撮影技術研究会が開かれます。カメラの使い方、絵コンテの書き方、脚本発表など映画制作に必要な様々な知識や技術を学ぶ場です。まだ映画作りがよくわからないという人は、是非足を運んでください。先輩がいろいろ教えてくれます。

部誌

映画のレビュー・批評や、様々な企画を行い、それらを記事にして発行します。去年から始まった比較的新しい活動なので、まだまだ試行錯誤でやっていますが、これからもっと発行していきたいと思っています。

年間スケジュール

北大映画研究会には１年間を通して様々なイベントがある。映研の１年の大まかなスケジュールを紹介。

4月　春新歓

新入生に向けて上映会や鑑賞会、撮影会を行うイベント。部員は不安と期待で胸がいっぱいだ。

5月　花見

例年は北大内でジンパ（ジンギスカンで親睦会）を行っていたが、去年は円山公園で花見を開催。今年の場所は未定だ。

6月　チーム制作

新入生が映画制作に慣れるために３チームほどに分かれて先輩と共に映画を作り上げるイベント。誰でも最初は上手くできない。臆せず自分の作品をつくろう！

北大祭

映研作品を公開したり、部員の好みの映画を終日上映する楽しい大学祭。部員の映画の趣味がわかるし一日に５本も映画を見れるというお得なイベントになっている。

チーム制作

7月　夏期脚本会

休み前に脚本やプロットを準備する。余裕があれば撮影を始めるのもありだ。

1年生映画制作

新入生もサークルに馴染んできたこの時期。一年生の力で映画を撮ってみよう！新入生同士で仲良くなる機会でもあるぞ。

8月　夏休み制作

待った待ったよ夏。映画を撮りまくろう。札幌の夏は暑すぎないので撮影にぴったりだ。

9月　合宿

夏の締めは合宿だ。どこかのコテージを借りてお酒を飲みながら、今年制作した映画を楽しもう。毎年、何かが起こるぞ。今年も期待しよう。

10月　秋新歓

さまよう新入生を発掘するイベントだ。幽霊部員が戻ってくるいい機会でもあるぞ。

秋制作

札幌の秋は美しく短い。白いものを見るまでが勝負だ！

11月　秋制作

12月　映研グランプリ

今年の映研映画から多彩な賞を決めるイベント。新入生ももちろん受賞を狙えるぞ。

忘年会

春に期待を寄せつつ力を蓄える時期だ。

1月　冬期脚本会

札幌の大学の合同上映会。今年は北大で開催だ。例年、北大映研が多数の賞を受賞する。今年もグランプリを目指そう！

2月　シネポリ

大学生もいつかは社会と向き合うのだ。４年生の背中をそっと押してあげよう。

追いコン

温泉でゆったり休憩だ。４年生が参加する最後のイベントでもあるぞ。

3月　温泉旅行

春新歓準備

映研が2013に観た映画の中から厳正なる投票でBEST10を選出して部員コメントを割と適当に掲載

さっそくDVD借りよう！

1位 横道世之介
監督 沖田修一

「この時代に生まれてみても悪くはなかったかな。」
「ダサくてうざくてマイペースでおせっかいな最高に愛おしい奴。」
「私は横道になりたい。」

3位 風立ちぬ
監督 宮崎駿

「菜穂子さんみたいな強くて優しくて綺麗な女性になりたい。」
「安定のジブリでしたね。」

2位 地獄でなぜ悪い
監督 園子温

「この映画は若くて映画を作っているナイスガイたちへのメッセージだね。」
「血！血！星野！血！星野！」

4位 パシフィック・リム
監督 ギレルモ・デル・トロ

「・・・何も言えねえ。」

5位 ゼロ・グラビティ
監督 アルフォンソ・キュアロン

「息つく暇がなかった。宇宙兄弟にはスリルが全くない。ヒビトは月で死ぬべきだったね。」

6位 プレイス・ビヨンド・ザ・パインズ
監督 デレク・シアンフランス

「カーチェイスでおしっこ漏らした。」

7位 セデック・バレ
監督 ウェイ・ダーション

「濃密すぎる4時間半に脳天ぶっ飛ばされた。」

8位 かぐや姫の物語
監督 高畑勲

「絵が狂ってるよね。アニメの歴史を塗り替えたと思う。」

9位 危険なプロット
監督 フランソワ・オゾン

「危うい才能に翻弄される。」

10位 ザ・マスター
監督 ポール・トーマス・アンダーソン

「これは分かったような分からなかったような作品だね。」

前ページで掲載した映研 BEST 10 の結果を受け、2013 年日本公開の映画について語り合うべく集結した映研部員の面々。映研がいつも映画について語り合っている雰囲気を少しでも感じてもらえたら幸い。

道上「これが２０１３年のベスト１０です。」
（紙を配る。）
全員「・・・・・・・。」
道上「どうですか？率直な感想。」
全員「・・・・・・・。」
道上「まあとりあえずい一つずつ見て行きますか（笑）」

10位『ザ・マスター』

西浦「ポール・トーマス・アンダーソンはどんどん難しい方向に進んでますよね。」
道上「ね。ちょっと路線が違って変わったよね。」
西浦「悲しいというか。まあそうなんだなと。」
山木「まあでも忘れられない映画だよね。」
西浦「いきなりみんな裸になってる（笑）」
山木「衝撃だよね（笑）」
（一同笑い）
道上「おばあさんの（笑）」
西浦「おばあさんの裸体が何の理由もなく出てくる（笑）」
山木「俺の目がおかしくなったか、と。」
道上「俺がおかしいのか、映画がおかしいのか（笑）」
道上「でも死んじゃったねー、もう。」
西浦「はあ～～（嘆息）。フィリップ・シーモア・ホフマン（泣）」
道上「映画界の宝ですよあの人。」
西浦「薬中で死亡。」

9位『危険なプロット』

西浦「まあ、うまくできてんじゃねえ、って。」
道上「俺は実はちょっと期待外れだったんだよね。」
大関「内容忘れちゃった。」
西浦「忘れちゃった。いやでもいきなり先生がドア開けて出てくるところは良かった！そこが一番面白かった。」
大関「そこ？（笑）」
道上「あとラストカットも印象的で面白かったけど。」
西浦「そうですね。マンションの窓がたくさんのカットですよね。」

8位『かぐや姫の物語』

山木「絵が大好きです。」
西浦「『かぐや姫』は素晴らしい。」
山木「絵は大好きです。俺は高畑が嫌い。」
道上「芳賀観た？」
芳賀「観ました。絵がすごいきれいで、なんか、日本人の心を取り戻した感じ（笑）」
（一同笑い）
芳賀「あとみんな地井武夫に笑ったと思う。」
山木「ひーめ、ひーめ、ひーめ。」
（一同笑い）
石川「私そこで泣いたけどな。」
道上「良いよね！」
西浦「僕はもう、その前のカエル捕まえようとしてる辺りから。」
大関「そこ泣きが来るのちょー早いよね（笑）」
西浦「そこから始まったんだよ。僕もうこの後泣くなっていう予感がしてた。」
芳賀「私も一番最初のところから「あっ」ってなった。」
西浦「ほら。ほら。」
山木「序盤の方が好きなんだよねー。」
石川「私、飛ぶところが嫌い。なんだっけ、なんとか兄ちゃん。」
大関「捨丸兄ちゃん！」
石川「そう！捨丸兄ちゃんといっしょに飛ぶところがあまり好きじゃなかった。」
道上「ほーー。」
石川「あっ、飛ぶんだ（笑）と思って。」
中村「そういえば捨丸兄ちゃんさあ、最後さあ、妻子いながらさあ。」
大関・芳賀「思った思った！」
中村「冷静に考えるとけっこうひどい奴だなーと思った。」
西浦「まあ愚かな人間達ですから。」
道上「映研ベストのジブリの二作品に限って見てみると、『風立ちぬ』の方が上だね。俺は個人的にかぐや姫の方が好きだけどね。」
山木「もう一回観たいのどっちっていったら『かぐや姫』だけどね。」
石川「『風立ちぬ』は、自分が頑張らないといけない時に観たい映画です。」
道上「なるほどね。どうしても最近観た方の映画が評価上がっちゃう（笑）良くないけど。」
山木「あるね。」
石川「『風立ちぬ』はあれですね、ジブリの映画にしては女性があまり強くない。」
大関「ああそうだね。」
道上「それ以外に今までのジブリのセオリーみたいなものいろいろ破ってるよね。」
西浦「終わりだな、終わったな、って感じです。『風立ちぬ』で一つできなかったんだろうなと思うのは、戦闘シーンだと思います。戦闘シーンが無い。それは今までの宮崎駿ではあり得ないと思うんですよ。書けなかったんだと。力量というか、もう歳だから絵が書けなかったんだじゃないかと思うんです。」
石川「ああ、なるほど。」
道上「『風立ちぬ』がこれまでと違うところは、踏み込んだ性描写があったとこもそうだけど、今までのジブリでは、空を飛ぶことがあれほど幸せな瞬間だったのに、冒頭の夢のシーンでそれが全否定されてしまう。空から落下してしまう。その時は、ああ、今までのジブリは終わったんだなと。」
山木「すべては夢でしたってことね。」
道上「予告編であの冒頭部分のみ流したのは意味があると思う。」

7位『セデック・バレ』

西浦「まあ、（ベストに入って）当然。」
道上「俺ベスト作った後に観たんだけど、あれはすごい映画だわ（笑）」
西浦「これは無視できない！スターウォーズぐらい面白い（笑）。そういう大作だと思いますよ。」
道上「あの長さを全く飽きずに観れたしね。」
山木「4時間ね。」
大関「長い・・・。」
西浦「僕4時間2回観てるから。」
石川「マジで（笑）」
西浦「女子供容赦なく刈っていく。だいたいみんな死ぬから。」
山木「エンディングだけ謎なんだけどね（笑）」
西浦「あっ、渡ったって（笑）」
山木「あっ、みんなで渡ったって（笑）」
西浦「文字通り虹を渡った。」

6位『ブレイス・ビヨンド・ザ・パインズ』

道上「俺自分でランキングに入れておきながらちょっと意外だったんだけど（笑）」
西浦「僕は推しましたけど入れてないですね。」
山木「西浦が観ろ！ってメーリス回したんだよね。」
西浦「僕が回したからじゃねえかっていう（ランキングに入ったことが）。まあでもカーアクションのところが凄すぎる。」
道上「あれはビビったね。」
西浦「バイク運転するの超コワいなと思うんですど（笑）。音とかがドキドキしちゃいますよね。」
道上「ハズレが無いね、デレク・シアンフランスは。他誰か観てないですか？」
「・・・（シーン）」
道上「確かに『パシフィック・リム』は2Dでも十分な気がするね。」
山木「音楽が良いよね。」
西浦「サントラ買いましたよ。もう100回ぐらい聞きましたよ。」
山木「テンテンテレレンテーンテーン。」
西浦「『パシフィック・リム』はあの映画を作ったこと自体が偉い。ありがとう。」
山木「基本肉弾戦でロケットパンチを出すのに時間がかかる。」
西浦「あ、本当にロボットがいる・・・って。あそこまで実体感出せるのってすごいですよね。よく勉強してるというか。好きなんだなあと。」
道上「ちょっと山木と西浦喋りすぎかも（笑）逆に女性の方々は『パシフィック・リム』どうですか？」
大関「最初はロボットかあ・・・って感じで観たんだけど、超面白かった。でも借りては観ないかな。」
西浦「えっっ！！いやその・・・ええっっ」
大関「いや！映画館で観るものかなって（笑）。」
山木「俺もこれは映画館で観るものだと思う。」
西浦「まあ女にはわからない！」
（女性陣笑い）
西浦「いや、全く注目してないと思うけど、脚動かす時にグガシャンッって動くところが。」
道上「そうそうそうそう！」
（一同笑い）
西浦「あれが、『パシフィック・リム』の本質。」
道上「今までロボット映画っていくつかあったんだけど、ほとんどの映画はロボットがすごく綺麗に動くんだよ。シャーーって。でも『パシフィック・リム』はグガアアシャアンッって動くんだよ。」
西浦「そこの感じが」
道上・西浦「素晴らしい。」
西浦「これが僕達が思ってるロボットだ。」
道上「一つ一つの部品が連結して、連動して、今この機体が動いてるっていう実感がすごいするんだよ。はあ〜〜（震える）。やばい！と。わかんないかー（笑）。」
（女性陣笑い）
道上「人間が動かしてるって感じがすごいする。今、操縦室で人間が一生懸命力いっぱい動かしてるってのがすごい画面から伝わってくる。」
石川「なるほどー。」
道上「『パシフィック・リム』観てすごい思ったのは、怪獣とかロボットの大きさを表すのが本当にうまい。登場した瞬間は絶対、全体を見せない。」
山木「ああそうだねー。」
道上「最初はいったい何が来てるんだ？って何がなだかわからない。見せても怪獣の一部分しか見せない。さらに、必ず高層ビルとかいっしょに怪獣の下半身とか一部分を映してる。うわーーー、でっっかいなこりゃあって。」

3位『風立ちぬ』

道上「まあ一応宮崎駿の」
石川「遺作。」
（一同笑い）
道上「いやいや（笑）。死んでない（笑）」
大関「勝手に殺さないでー！」
道上「まあ引退宣言したので、遺作かもしれませんけど。」
西浦「引退っていうのは、毎回そうですけど、描ければまた戻ってきますよ。描ける描けないが毎回あるから。まあでももう歳だから、多分『風立ちぬ』で零戦の戦闘シーン描けなかった時点で、そろそろ描くこと自体は限界来てるとは思うんですけど。」
山木「生きねば。」
石川「最後は高畑と宮崎二人で作れば良かったの西に・・・。私の希望としては。」
西浦「ああ、でもそれあるかもね。あるかもよ。二人でやればできるかもしれないから。まあ昔は二人でやってたんだけど。」

2位『地獄でなぜ悪い』

道上「いやー、順位高い。意外。」
山木「高いよね。」
西浦「高い。」
道上「1年生の順位が高かった。」
西浦「（1年生が）初めての園子温。初園子温『地獄でなぜ悪い』いいですね。入りやすい。」
山木「まあエンタメに吹っ切れてる。」
西浦「学生時代から本人（園子温）がおんなじようなことやってた。」
道上「園子温は自分の体験を作品にめちゃくちゃ反映させるからね。あの人の人生自体が映画みたいな。わざとカルト宗教団体に入ったりとか。」
山木「企画無いのに企画持ち込むとか（笑）。」
西浦「ハリウッドに単身で行ってその場で思いついた企画をその場で言う（笑）。」
道上「その時の悔しさで、『その時の悔しさで、「糞ハリウッド！」と思って作ったのが『愛のむきだし』らしいよ。日本でもやれるんだぞ、と。」
山木「今日は録音してるから違う空気が流れてる（笑）」
西浦「喋っていいよ（笑）」

5位『ゼロ・グラビティ』

道上「いやあ、すごかったね。単純に。凄かったよ。なんかもう時代が違うなっていうか。緻密に計算された脚本なんてもういらないって感じするもんね。」
山木「映研も3D撮りますか（笑）」
（一同笑い）
中村「なんか3Dカメラって売ってるみたいだね。そんな高くないやつが売ってるような。」
道上「ほーー。」
大関「私、前見た気がする。」
井上「『ゼロ・グラビティ』観た後に、めまいするというか酔う感じに。」
西浦「わかる。あれ酔うよね。」
道上「ついさっき脚本が緻密じゃなくても、って言ったものの、『ゼロ・グラビティ』は映像の演出に対応したちゃんとした脚本だと思ったけどね。」

4位『パシフィック・リム』

西浦「僕、2Dで観たんですけど（笑）」
一同「えっ！」
西浦「公開最終日に観に行ったんで、ちょっと。」
道上「2Dでも良かった？」
西浦「いやだって、僕最初のロボット出てきたところで泣きましたもん。」
（一同笑い）
山木「3Dは目が慣れてきちゃって、途中から映像が層になってみえちゃう。」
西浦「ああ、3Dの欠点ですね。」
西浦「ちゃんとできてますよね。」
道上「多すぎず少なすぎず。」
西浦「必然性が感じられますよね。」
道上「うん。ちゃんと作ってる。」
西浦「長回しすごかったですよね。」
道上「あの時鳥肌立ちまくった。冒頭の10分くらいね。」
西浦「なんかでもあれは長回しと言えるのか（笑）」
道上「宇宙空間を表現する一番最適な方法かも。」
芳賀「息止めるシーンで自分も「んーーー」って息止めました（笑）」

山木「『愛のむきだし』も友達の話だしね。」
西浦「『地獄でなぜ悪い』はテンポがめちゃくちゃ早かったですよね。邦画では他に無いくらいの。あと、前半の自主映画撮ってるところもっと深く描いても良かったと思いますけどね。」
道上「そうだね。おそらくあれは園子温自身だと思うからね。」
西浦「最後の銃撃戦なんてむしろどうでもいい（笑）。」
芳賀「去年観た映画で一番印象に残ってる映画は？って言われたらこの映画です。なので私も2位に入れました。」
道上「いやあ、でも2位は高いね・・・・。」
山木「うん。」
道上「中村さんは観ましたか？」
中村「観た観た。まあ面白かったっちゃ面白かったけど、こんなに順位は高くない。」
西浦「2位には入んない。」
道上「そうだね。と言いながら、俺10位に入れてるんですけどね（笑）」

1位『横道世之介』

道上「じゃあ、ついに第1位の『横道世之介』ですね。」
全員「・・・・。」
道上「誰が喋るか？みたいな感じですか（笑）」
山木「1位かー。」
西浦「『横道』1位は自然だなと思いますけどね。」
道上「褒めるべきところは褒めてるなと思うよ。間違ってはないと思うけど。」
西浦「『横道』1位は主張がありますね。」
石川「横道さんみたいになりたい。」
道上「横道さんみたいな人と付き合いたいとかじゃなくて？」
石川「横道さんになりたい。こいつ悩みねえだろーなーって。」
西浦「あれはみんなの記憶の中で語られてるから当然良い人になる。」
石川「アレ（横道）の恋人には絶対なりたくない。うだつが上がらなそう。」
道上「アレ（笑）。じゃあそういう観点で女子トーク展開してください。芳賀どうですか？」
芳賀「え？彼氏！？（笑）」
西浦「いや大変ですよ。実際付き合ったら。あんなの。横道って人情とか無いですよね。基本的に。」
石川「ないわ。自分の気持ちのまま動いたらたまたま良いことしたみたいな感じですから。良い人ってわけじゃない。」
大関「そうだね。」
石川「吉高由里子の演技に嫌味がないのはすごいと思いました。」
西浦「わかる。」
道上「そうだよね。」
石川「あれは女優の力ですかね、演出ですかね。」
西浦「まあ両方だと思うけど、吉高由里子すごい。」
芳賀「年数経った時に吉高のキャラが全然違うキャラになってたのが個人的に良かったなあと思います。」
山木「でもあのラジオはいらなかったね。」
大関「ああ、ラジオね。」
西浦「あそこだけ浮いてましたね。」
山木「わかるから説明しなくていいよって。」
西浦「入れろって言われたんじゃないですか。まあでも普通入れないですよね。これが邦画か。」
山木「脚本を読んだんだけどね、横道が地元に帰ってる時に、元カノに「帰るところ東京になっちゃったんだね」って言われるシーンがあったんだけど、そこカットされてて、あー、カットされたかあと思った。」
大関「いい台詞。」
西浦「まあ横道は映画全体を通して変化を感じさせるのがうまい。」
道上「うん。うまい。しかも主人公中心の出来事で感じさせてるわけじゃなくて周りによって変化してくからね。」
西浦「ちょっとしたことがきっかけで変わってく。あと横道はもっと年齢重ねた後に観たらもっと違うんだろうなあって思います。大学生のうちには本当の良さがわからない。」

参加メンバー独断でベスト作成

道上「このメンバーでベスト作り直しちゃいましょ。」
西浦「横道は1位でいいと思いますよ。」
中村「個人的には『ホーリーモーターズ』を入れたい。」
山木「この前観たんだけど『君と歩く世界』良かったよ。できればベストに入れたい。」

1位：『横道世之介』
2位：『セデック・バレ』
3位：『パシフィック・リム』
4位：『かぐやぎ姫の物語』
5位：『風立ちぬ』
6位：『ホーリーモーターズ』
7位：『スプリング・ブレーカーズ』
8位：『プレイス・ビヨンド・ザ・パインズ』
9位：『ザ・マスター』
10位：『君と歩く世界』

映研部員推薦映画

今年の春から晴れて大学生になった
新入生のみなさんに、是非観てほしい
映画を映研部員が推薦。

『きっと、うまくいく』

本田さち

私がインド映画を初めてしっかり観たのは、この作品でした。そして、初めてのインド映画がこれで良かったと思いました。出来ることなら、大学一年生の時に観たかったと悔しくなりました。新入生の方、今だと思います。この時を逃してはいけません。だからと言って気を張らずに映画に身を任せてください。笑

監督：ラージクマール・ヒラニ
公開：2009 年（インド）

『ショーン・オブ・ザ・デット』

三浦広卓

タイトルからも分かるよとおりゾンビ映画。ゾンビ映画というと、気味の悪いものを想像してしまうが、この映画はひたすら笑える。いつもいつも同じパブで飲むだけの生活から一変、ある日世界はゾンビだらけに。主人公ショーンとし親友エドは逃走のシュミレーションを何度も思い描くも必ず最後はパブで呑気に一杯やっている。目の前のわずかな希望を信じて必死に生きようとする彼ら。その姿がどうしようもなく面白い。ゾンビ映画のお約束を守りながら、とにかく笑える映画。好きなシーンは、コレクションのレコード盤を武器にしてゾンビに投げつけようとする主人公に親友エドが「それは、お気に入りだから投げちゃだめ！」ってところです。

監督：エドガー・ライト
公開:2004 年（アメリカ）

『船を編む』

中村おとわ

最近観た中で「ああ、もっかい観よう」と唯一思えた作品でした。90 年代半ばのお話で辞書が電子辞書の台頭によって、紙から電子の時代に移り変わってしまうかもしれない！でも辞書作るぞ！最近の若者の変な日本語だって用例採集しちゃうぞ！という感じなんですが、辞書にも一冊一冊載っている言葉の意味に違いがあって、作中で主人公馬締くんが「恋」の意味に実体験を織り交ぜてくれたことによって、殆ど表情がずっと同じ彼が実はこんな風に恋い焦がれてたのね！！という見方もできました。非常に萌えます。この映画を観ると今後辞書に対する愛着が増します。辞書愛おしい。辞書作っている人達も愛おしい。観てみて下さい。

監督：石井裕也
公開：2013 年（日本）

『スノーピアサー』

社本遥

これを観て映研らしく無かった私がやたらと映画を観るようになりました。色々なエッセンスが詰まっていてい映画ってすごいなって思いました。映画の面白さに気づかせてくれてありがとうございますスノーピアサー！！！

監督：ポン・ジュノ
公開：2013 年（韓国）

『ダージリン急行』

道上寿人

この映画は私が大学に入学したての頃に観た映画です。その時の記憶は今でも鮮明に残っています。『天才マックスの世界』『ザ・ロイヤル・テネンバウムズ』『ムーンライズ・キングダム』などなど数々の傑作を生み出したウェス・アンダーソン監督がインド舞台に製作した映画。オープニングから抜群の美的センスとユーモアセンスが炸裂しています。その才能に幾ばくか嫉妬さえ覚えます。外れがないウェス・アンダーソン作品の中でもこの映画が個人的に一番好きかもしれません。かれこれ 5 回ほど観ています。休日の昼間にふと観たくなるのです。是非手にとって観てください。

監督：ウェス・アンダーソン
公開:2007 年（アメリカ）

『グラン・トリノ』

田中香月

途中のイーストウッドと少年の心の交流もさることながら、ラストシーンは思わず「あっ」と声を出して驚くと思います。

監督：クリント・イーストウッド
公開:2008 年（アメリカ）

『アギーレ／神の怒り』

番場巽己

1560 年、原住民を征服にやってきたスペインの軍団長が、エルドラドを探してアマゾン川で迷子になる話です。ヘルツォーク監督はドイツ人です。異常な環境とか人物に主眼を置いた無茶な作品を多く作っておりまして、この映画は例外も例外ではありません。映画の舞台はアマゾン源流、アンデスや山脈の奥まったところです。軍団が山を越えているオープニングショットから、こんなところで映画撮るなんて頭おかしいだろと思わせる、暴力的なジャングルと険しすぎる岩山が画面を覆い尽くします。困難極まる撮影が、逆に異様な緊迫感を生んでまして、世にも奇天烈な映像が出来上がっています。映像だけでも必見のこの映画。「我の強い人間の栄光と破滅」ものジャンル映画の大傑作として楽しむことも出来ますし、監督と主演俳優の狂人パワーと圧倒的な大自然の映像が合わさって、単純に映画って凄いなって思わせてくれる作品です。必見。

監督：ベルナー・ヘルツォーク
公開:1972 年（西ドイツ）

映画はこうやってつくる！

立案する

グループでどんな映画を撮るかアイデアを出し合うこともあれば、誰かが「こんな映画が撮りたい！」と発案することもあります。

プロットを書く

大まかなストーリーを考えます。もやもやっとしていたコンセプトを具体的な物語にします。

脚本を書く

具体的なシーン内容を考え、台詞や登場人物の行動を描写していきます。映研では、立案の段階で脚本まで書き起こす人が多いですが、コンセプトやプロットの状態でアイデアを出し、脚本は別の人にお願いするという人ももちろんいます。

スタッフを集める

監督を誰がやるか、脚本を誰が書くかなどを決め、必要なスタッフを集めます。映研部員は基本的に、呼べば来ます。

キャストを集める

必要なキャストを決め、出演をお願いします。知り合いに頼んだり、映研部員に頼んだりすることが多いです。映研部員は大体快く出演してくれます。

絵コンテを書く

絵コンテとは、具体的にどんな映像を撮り、どんな順番で繋げるのかを、絵と文字で書いた設計図です。自分の頭の中に描く監督もいます。

役割分担

監督…演技指導したりスタッフへの指示を出したり、撮影した映像をチェックして総合的な判断をします。**助監督**…監督の補助や、細かい連絡・管理をします。カチンコを叩くのはこの人。**脚本**…脚本を書きます。**編集**…撮影した映像を切り貼りして、映画にします。**撮影**…カメラで美しい映像を狙います。**録音**…ガンマイクでキャストの台詞や足音などを狙います。**照明**…ライトアップで画をより美しくします。**その他**…衣装を準備したり、カメラマンを乗せたカートを引っ張ったり、ロケ地を提供したり、いろんな仕事があります。

撮影機材

映研にある撮影機材は、HDVカメラ、三脚、小三脚、レコーダー、ガンマイク、照明、レフ板などです。最近は個人所有のデジタル一眼カメラを使った撮影が増えています。なんと今年、新しいカメラをゲット！…ドリーはありませんが、工夫していろんな映像を撮ろうと頑張っています。

打ち合わせ

意見を出し合って脚本や絵コンテを叩き直したり、スタッフの役割分担、必要な道具や衣装、ロケ地、撮影スケジュールなどを決めていきます。

ロケハン

ロケ地に行き、建物の配置や部屋の大きさ等を考慮して、具体的にどうやって撮影するかを決めます。脳内ロケハンで済ませたり、出たとこ勝負をすることもあります。

▲かまくらが必要なら作ります

準備する

ロケ地交渉、小道具や衣装の準備をします。

撮影する

いよいよ撮影！　撮影にかかる日数は、映画の尺やロケ地、監督のこだわりなどにもよりますが、15分程度の映画ならおよそ3日～6日くらいです。

▲マイクの確認中

編集する

データをパソコンに取り込み、映像と音を繋げていきます。色を調整したり、ノイズを除去したり、音楽をつけたり、エフェクトをかけたり、撮影時のミスに気づいて絶望したり、ごまかしたりします。

完成！

打ち上げに行きます！

上映する

部内、学校祭、外部のイベントなどで上映します。